

幼児の造形表現教育におけるコラボレーション型活動プログラムの実践研究 ——宝仙学園幼稚園での活動プログラム「お絵描き〈園足〉」の試み——

Practice Research of the Collaboration Style Activity Program in Art Education of Young Children:
An Attempt at the Art Program "Drawing Works <Ensoku>" in Hosen Gakuen Kindergarten

捧 公志朗^{*1}、太田 賢^{*2}

SASAGE, Koshiro OTA, Satoshi

本研究レポートは、平成22年5月に宝仙学園幼稚園年長クラス「池組」を対象として行った造形活動プログラム「お絵描き〈園足〉」について、プログラムの実践記録とその考察をまとめたものである。このプログラムは、こども教育宝仙大学と宝仙学園幼稚園の教育者間での相互的な連携協力による幼児教育活動の実践であり、幼児の造形表現活動、特に5歳児における絵画制作活動の実験的カリキュラムとして計画、実施されたものである。プログラムの企画、ならびに、本研究レポートの作成は、それぞれの教育機関の教員である捧（大学・造形表現科目担当）と太田（幼稚園・年長クラス担任）が担っている。

研究のキーワードである「コラボレーション型活動プログラム」とは、研究領域、あるいは教育領域の違う教育者が協同的に教育活動のプログラミングを行ってみることを意味している。こうしたプログラムの在りようは、幼児の個性を発見し生きる力を育てるための教育とその環境の充実が求められる今日の幼児教育現場に対し、人的な連携、組織によって、柔軟に保育活動を行なっていく可能性を持つものである。本研究レポートにおいて、「コラボレーション型活動プログラム」の実践としての「お絵描き〈園足〉」を振り返り、考察するとともに、今後の幼児教育での造形表現活動の展開に繋げてみたいと考えている。

キーワード：幼児教育、造形表現教育活動、保育実践研究

Abstract

This research report is something which collected the practice record and the consideration of the art program "drawing works <ensoku>". The program was done for Hosen Gakuen Kindergarten "Ike class" in May 2010. As for this program, art expression activity of the young children and the picture production activity especially in 5 - year - old children is experimental curriculum, and it is a practice education case of the infantile education research with mutual cooperation of Hosen College of Childhood Education and Hosen Gakuen Kindergarten. Creation of plan and execution, and this report of the program bore by Sasage (assistant professor of college, charge art expression subject) and Ota (preschool teacher, charge older class).

It is keyword of research, "the collaboration style activity program", the fact that the educator where the research and the education area is different tries doing programming. Confronting the present infantile education actual place where completeness of education and the environment in order to raise the power which discovers the personality of the young child and lives is required, this program is something which has the possibility of keeping doing nurture activity flexibly with human cooperation and organization.

In this research report, we would like to keep being able to thread to the activation of the expression activity in future infantile education, via the looking back of the collaboration style activity program " drawing works <ensoku> ".

はじめに

コラボレーション型活動プログラム「お絵描き〈園足〉」は、平成22年5月24日、31日の二日間にわたり、宝仙学園幼稚園年長クラスを対象として、こども教育宝仙大学の捧と宝仙学園幼稚園の太田によって企画された保育活動である。活動の対象となった幼児は、太田が担

任をする年長クラスの「池組」の子ども達である。

幼稚園での教育現場の太田から出された「子ども達の感性を開く表現活動を、どのようなかたちで日常の幼児教育現場の中で実践的に導入、展開できるのだろうか」という課題提起をきっかけとして、今回のプログラムに対する協議はスタートした。協議において、保育者、研

※1 こども教育宝仙大学助教

※2 宝仙学園幼稚園教諭

究者等、幼児に関わる様々な領域の教育者が、それぞれの専門領域の知識と技術を持ち寄り、身近な環境にある人的、空間的、物理的な諸条件を有効的に活用し課題の解決を見出す方法論として、コラボレーション型の教育活動が導き出された。具体的に宝仙学園幼稚園とこども教育宝仙大学との施設を共有化させ、そこで造形表現活動を実施するプランでプログラムは決定した。

本研究レポートは、「お絵描き〈園足〉」の実践記録とその考察についてまとめたものである。レポートは、「活動に至る経緯」、「プログラムにおける造形表現の捉え」、「プログラムの記録」を捧と太田が、「プログラムの考察」、「活動の今後の課題」を捧が、それぞれの関わりからまとめていった。尚、本文中でのそれぞれの執筆は、文末に、捧は「*」と、太田は「**」と明記をした。

活動に至る経緯

コラボレーションの意義 (幼稚園教諭の思いと活動への関わり)

幼稚園で行う造形活動は、行事に関する制作であったり、子どもの発達に応じた制作を行ったりすることが多い。そのために各担任教諭は様々な参考資料の講読、研修への参加等、日頃から保育技術を高めるように努めている。そして実際の活動は、担任自らが指導を保育後に反省をし、振り返ることがほとんどである。しかしそれだけでは保育者だけの考えに陥りやすく、活動を客観化できない部分も出てきたりするため、より自己の保育技術を高める方法として、造形表現分野の専門研究者から助言や技術指導を受け、保育を行うのが良いのではないかと考えた。

また、幼稚園教諭側から子どもの発達や成長の姿を伝える交流を通して、より良い造形表現活動とは何か、年齢にあった造形指導とは何かを考えたいと思った。そして子どもにおいては、普段の保育活動ではなかなか行うことのできない表現活動によって、造形活動の楽しさを全身で感じ、表現や経験の幅を広げるきっかけになるのではないかと考えた。これは保育者として、園の中で生活するだけではなく、非日常的な活動を子ども達と行っていきたいという思いがあるからであろう。普段とは違う活動を経験することは、子どもにとっての興味と関心が膨らみ、遊びの世界が広がるようになるからである。今回のプログラムを、これからの生活や遊びが広がるきっかけとなる活動にしたいと考えた。

活動の場所となった宝仙学園は大学と幼稚園が隣接し、子ども達の移動が容易であり、また大学の施設は保育室では行えないような大きな活動が可能である。そのことをふまえ、プログラムは巨大な紙を使った絵画活動に決

定した。また、保育室から大学までの導線は反射テープによって装飾し、非日常的な風景から活動への期待感を作り上げる環境を準備することにした。

完成する作品の鑑賞方法についても、通常の保育活動とは違うアプローチを協議した。普段は子ども達の作品を保育室内に飾っているが、それを子ども達と意識して見ることがあまりなかったことを反省し、今回は作品を大学の校舎に展示することで、それをあらためて観に行くことをプログラムとして据えた。保育室で作品を観るのではなく、周囲の環境と作品とを照らし合わせ、日常とは違う観方が経験できるよう計画を進めていった。そして、子ども達が絵の細かな部分まで観ることができ、そこからの様々な気づきによって、鑑賞行為そのものが想像力を膨らまし、楽しさを感じていけるものにしたいと思った。**

活動プログラムの立案

子どもの感性を開く表現活動について、どのようなかたちで日常の幼児教育現場の中で実践的に展開できるだろうか。平成22年1月より、コラボレーション活動プログラム「お絵描き〈園足〉」の立案協議は始められた。協議では、「専門分野の知識や技術を幼児教育におろし、子どもの興味と意欲を拡げていく仕掛けを作る」、「クラスの子どもの達が非日常的な表現活動を経験する」、「ユニークな造形表現活動を実践し、子ども達がワクワクする保育を展開してみたい」、「幼児教育に関わる教育者間の連携によって、有機的な幼児教育活動を行ってみる」等、企画者間での具体的な希望やイメージの確認から計画を具現化させていった。

今回の計画では、プログラムの協議や連携作業が企画者双方の帰属する学園内において持てたことが、プログラムを作る上での大きなメリットとして働いている。プログラムは、宝仙学園という同じ学園に帰属する二つの教育機関（こども教育宝仙大学、宝仙学園幼稚園）における事例であるものの、幼児教育に携わる教育者間の相互連携によって、保育現場に向けた実践的なアプローチがどのように可能であるのか、あるいは、子ども達の感性を刺激するプログラムをどのように訴求していけるのかという幼児教育の質的向上を、その目的の背景に持っている。そして実際に、現場の幼稚園教諭と幼児教育に関わる大学教員が協同的に保育について協議し、子どもの教育現場の現況を共有することを通じて、具体的に子どもの保育活動を実践するネットワークやパートナーシップ、その活動環境等が作られていくことを、今回のプログラミングから期待した。

また今回のプログラムは、その活動名を「お絵描き〈園足〉」としている。活動名の中にある「園足（えんそく）」

という言葉は、プログラムのために作成した造語である。「遠足」と同じ音を持ち、「ちょっと遠い場所へ出向く楽しいお出かけ」といったイベント的なイメージを重ね合わせたネーミングである。そして活動は、保育演習室を中心に大学キャンパス内の施設を利用し、対象の子ども達が幼稚園の保育室から大学の教室までを移動するささやかな「園足」を楽しむ設定としている。同じ教育施設内の二つの空間（幼稚園、大学）を子ども達が行き来する活動スタイルにも反映されるように、今回の取り組みは、幼児教育に関わる教育者間の教育実践活動（コラボレーション型活動プログラム）を、双方の持つローカルな環境から作り出してみる試みでもあった。*

プログラムにおける造形表現の捉え

幼稚園での造形表現活動の過程

入園したばかりの子ども達は不安で一杯である。入園後の3歳児の子ども達は、まず保育者や園の環境に慣れることから幼稚園での生活を始める。そして好きな玩具や遊びを見つけ落ち着いて過ごすようになる頃から、クレパスで自由に絵を描くことも始める。保育者は子どもに対し、用具の扱い方を楽しく伝え、塗りつぶすことを通じ素材との関わりを十分に経験させていく。

また園庭において、水や泥遊び等も経験をする。3歳児の子どもは、最終的な目的に向かって遊ぶのではなく、触れた感触、視覚等の五感を通して感じたことをその時々遊びにしていく。泥遊びでは、全身を使って泥だらけになる子どもや指先で泥の柔らかさを感じている子ども等、様々な子どもの姿が見られる。また園での作品展に向けた造形表現活動では、筆を使うのではなく、フィンガーペインティングや足型を使った絵の具の活動を行い、感触を楽しむ。また、丸、三角、四角の形を自由に配置して動物のお面を作る活動等も経験をしていく。3歳児では、五感で感じることを大切に考え、保育の中に積極的に取り入れている。この五感で感じる経験が、幼稚園での造形表現活動の土台になるのである。

4歳児になると、自分の作りたい物を少しずつイメージできるようになる。様々な教材や素材に触れる機会を保育者が意識的に用意し、造形活動を行事の中に取り込んでいくことで、物を作る意欲や力を養っていく。また遊びの中では廃材等を使い、乗り物や遊びに必要な物を自らが作り出せるようになる。

園の作品展に向けた活動では、人形の制作を試みた。手や足、顔のパーツの形を考え、服の色をどのようにするか等、色や形を計画しイメージを表現することを試みた。また、クラスで一つの目的に向かってイメージを共有し、作品を制作することも行った。3歳児の子どもは

個が中心であったが、4歳児になると周囲の友だちの存在が大きくなり、個から集団への意識の変化が見られる。この時期の子どもの発達の様子は、造形活動の内容にも反映をしている。

5歳児になると、これまでの経験が活かされる作品制作が多くなっていく。またこの時期の子ども達は、年中クラスまでの園での造形活動で経験してきた技術や素材の感触、場面に応じた教材の選択だけでなく、それぞれの家庭での経験も活かせるようになる。例えば新幹線を廃材で作る際、必要な素材の選び方に加え、その物らしい形に切ったりテープでつなげたり、細かく窓やタイヤをマーカーで描いたり、日常での経験や記憶が子どものこだわりとなって制作行為に現われてくる。

また絵画表現では、動きのある絵を描くことができるようになる。運動会で自分がリレーで走っている姿、友だちとジャンケンをする姿など、腕の振り方、指の先の形、顔の表情にいたる細かな部分まで表現ができるようになる。

幼稚園での三年間の子どもの発達を意識していくことは、造形表現活動での各学年で大切にしていきたい表現内容やその活動目的を明確にすることに繋がる。今回のプログラムを実施した宝仙学園幼稚園では、どの学年でも「感じる」ということを大切に保育を行っている。「お絵描き〈園足〉」に参加した「池組」の子ども達も、こうした「感じる」力により、全身でプログラムを楽しめることを期待した。**

絵を描くこと

今回のプログラムに関わった幼児は、幼稚園年長クラス「池組」の子ども達である。この時期の子ども達は、それまでの絵画活動において、いくつかの描画用具や素材の使用経験を持っている。クレパス、マーカー、筆、鉛筆等、それぞれの用具による表現活動は、色彩や形として現れる形象への面白さや関心を通じて、素材を扱う技術を身につけ、自己のイメージを具体的に平面空間の中に表現する力を育てていく。そしてこれらの用具は、それぞれに描く感触や味わいの特徴を持ち、活動のテーマや作品の内容と深く関わるものである。

そしてこうした描画用具の特徴を活かし、絵を描く行為と身体運動性や空間感覚とを一体化させながら、幼児の絵画活動は展開されることが望ましいと考えられる。クレパスを使った描画活動では、腕や手首等の間接の動きと、垂直方向に線を描いていく運動性や力の移動とが密接に繋がり、描くことから幼児の身体能力をも発達させていく。また筆を使った絵の具の絵画活動では、軸の長さによって、筆を持つ位置と絵の具が着地する紙の面までの距離感覚を養わせる。子どもはこの距離感覚によ

って、描く形をコントロールする技術を覚え、肩を基点として大きく形を描く経験をするのである。

このような幼児における絵を描くことと身体の運動性や空間との関連をふまえ、今回のプログラムはその活動内容を方向付けている。対象となった幼児の幼稚園での「感じる」ことを活かし、より積極的に身体や五感に働きかける表現活動の可能性を、今回の「お絵描き〈園足〉」から検証してみたいと考えた。*

表現の素材とその展開方法

今回の活動では、素材はポスターカラーと色模造紙を、また描画用具は丸筆を使用している。絵の具は「赤」、「青」、「黄」の三色に「白」を混色し、明度を高めた10色を用意した。また色模造紙も彩度の高い「黄緑」を使用し、四六判15枚前後を繋ぎあわせ、3グループ分の巨大な活動環境を用意した。絵の具、紙ともに素材の持つ色彩からの刺激が、活動への導入やきっかけに繋がるよう意識的に色彩計画を行った。こうした環境設定により、今回の絵画活動ではものの形を象徴的に描き進めるといった目的が弱まり、絵の具そのものの物質性に触れ、身体的な表現としての絵画表現活動を行うことに向っていった。

活動では絵の具をカップ状の容器に入れ、各色専用の筆とセットにした。子ども達は、ファシリテーターの促しによる三種類の描き方で、画面に絵の具の線を入れていく。筆の軸の長さによって生まれる線描のストロークを楽しみ、また次第に密度の広がる画面の上にも上がっていきながら、絵の具の物質性と画面空間とを身体で感じていく活動に展開していった。

こうした活動の展開方法は、1950年代から60年代にかけて盛んに行われた実験的な絵画表現活動と重ね合わせ、制作をイメージした。ジャクソン・ポロックのドロッピングや、イブ・クラインのボディー・ペインティング、

あるいは具体美術運動の白髪一雄の絵画行為等、絵の具という素材を物質として扱い、また描くという行為を身体的なものとして捉えることによって、表現のダイナミズムを画面上に引き出してみようとする実践方法である。今回の絵の具に対する捉え方は、子ども達にとって「描く」ことの捉え方を広げる出来事であってほしいと考えた。*

活動における物語性の導入

活動の画面として設定する色模造紙には、有機的な曲線のフレームを挿入し、それを「池」に見立てた。フレームの形は、活動の対象となった子ども達のクラス名にイメージを重ねたことと合わせ、クラスの水槽で飼育しているオタマジャクシを、今回の活動を進めて行くためのイメージ・キャラクターとしたことにより決定した図像である。

日常的に保育室でオタマジャクシを見ている子ども達にとって、その生態環境としての「池」はイメージしやすいと考えた。またオタマジャクシがカエルへと成長する過程も理解しやすく、その特徴的な体の形の変化は子どもの関心を引くものである。そうしたオタマジャクシの成長過程の持つ物語性をプログラムに取り入れ、制作時の導入や描く動機作り等に活かし、制作への意識付けにユーモアを付加させた。幼児の表現活動を展開する場合、こうした子ども達の身近な素材を使った物語性からイメージを展開させ、子どもの興味や関心、活動に対する楽しさを引き出すことは、非常に有効な指導方法であると考えられる。

更に、実際に絵の具を使う活動展開では、オタマジャクシやカエルの泳ぎ方をイメージする描き方によって制作を進めることにした。活動の様々な場面において導入される物語性は、活動の展開をより深め、子ども達が制作に集中して取り組める環境を作るものなのである。*

プログラムの記録

- ・活動名 「お絵描き〈園足〉」
- ・対象 宝仙学園幼稚園年長クラス「池組」(28名)
- ・実施日時 ①平成22年5月24日(月) 9:50~10:50(作品の制作)
②平成22年5月31日(月) 10:50~11:05(作品の鑑賞・まとめ)
- ・活動の場所 ①作品制作：大学3号館保育演習室
②作品展示：大学1号館外壁、及び、プレイルーム、大学3号館エントランスホール
③作品の鑑賞・まとめ：大学1号館参道、大学3号館エントランスホール

・活動のねらい（幼児）

- ①共同制作による絵画制作活動を楽しむ
- ②大きなサイズの紙を使用した制作を通じ、身体的な造形表現を体験する
- ③描いた作品から壁面装飾を楽しむ

（指導者）

- ①非日常的な出来事としての造形表現活動を展開する
- ②活動のプロセスの中に物語性を付加し、子どもの参加意欲を高めていく
- ③身近な環境を活用し、実験的な保育活動を行ってみる

・活動の内容

- ①共同制作による絵画作品の作成

3グループに分かれ、大きな紙に絵の具を使って「池の絵」を描く活動を行う。描く際、池にいる生き物（オタマジャクシ、カエル）をモチーフとしてイメージを膨らまし、制作を進めていく。

- ②作品の鑑賞

作品の鑑賞から、子どもが自らの描いた行為を再発見する。また作品の展示状況（巨大な絵画作品が設営された校舎の風景）や、図像の面白さ（池の形を雲に見立てる等）を楽しむ。

・教材、道具

ポスターカラー（赤、青、黄、白）、色模造紙、水彩用筆、バケツ、ビニールシート、プラスチックカップ（絵の具入れ）、ウエス、足洗いおけ、タオル、反射テープ、画用紙

・活動の担当

- ①全体の進行、クラスの誘導：太田（宝仙学園幼稚園教諭・年長クラス「池組」担任）
- ②作品制作、鑑賞のファシリテーター：捧（こども教育宝仙大学助教・造形表現科目担当）
- ③活動の補佐：高橋（宝仙学園幼稚園教諭）

・事前の準備作業

（5月24日に向けて）

- ①配色計画と絵の具の準備。各グループにつき、10色を用意する。【写真1】
- ②色模造紙を繋ぎ合わせ、作品の台紙を作る。また子どもが描く領域を決める。【写真2】
- ③幼稚園保育室から活動を行う大学演習室まで、反射テープによる導線を設営する。【写真3】

（5月31日に向けて）

- ①捧と捧ゼミの学生が、描いた作品に展示用の額装（フレーム付け）をする。
- ②作品を大学施設内の各展示場所に設営する。【写真4-6】
- ③幼稚園保育室から活動を行う作品展示場所まで、反射テープによる導線を設営する。



1



2



3



4



5



6

・活動の流れ

① 5 月24日

時間	幼児の活動	捧の動き、配慮	太田の動き、配慮
9:15 (登園)	<ul style="list-style-type: none"> ・保育室のテラスから出ている反射テープに興味を持ち、見たり、触ったりする。【写真 7】 ・何故あるのか、疑問を持つ。 		<ul style="list-style-type: none"> ・反射テープに興味を持てるよう、子どもに声を掛け、近くで見よう促す。 ・子どものイメージや興味が広がるような言葉掛けを行う。
9:35 (朝の会)	<ul style="list-style-type: none"> ・一日の流れを知る。 ・テラスに行き、近くで反射テープを見、テープがどこに繋がっているのか考え、個々が考えたこと言う。 		<ul style="list-style-type: none"> ・一日の流れを子どもと確認する。 ・【写真 8】 ・全員が反射テープの存在に気付けるよう、気付いている子どもの発言を取り上げて話を行う。 ・なぜ反射テープがあるのか、子どもが考えたことを取り上げ、興味や疑問を持てるようにする。 ・反射テープを辿ってみることを提案する。
9:40 (移動)	<ul style="list-style-type: none"> ・エプロンを脱いで、傘をさして園庭に集まる。 ・反射テープが続く所を辿りながら歩く。【写真 9】 ・何が起こるか期待しながら静かに階段を上る。【写真10】 ・3つのグループに分かれる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・エプロンを脱ぎ、園庭に集まるよう伝える。 ・反射テープを辿りながら、何があるのか子どもに問いかけながら移動し、興味がより持てるようにする。 ・静かに歩きながら、普段とは違う雰囲気を感じられるようにする。 ・危険がないよう全体を把握する。
9:50 (導入)	<ul style="list-style-type: none"> ・部屋の中の大きな紙や絵の具、捧に興味を持ち、辺りを見回す。 ・靴を脱いだり、袖をまくったりして、捧の周りに集まる。 ・【写真12】 ・反射テープについての話や、これから行う活動の内容について興味を持って聞く。【写真13】 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動に対する子ども達の興味や関心を切らさないことを心がけ、活動場所（演習室）への誘導を行う。 ・活動の状況を含め、子ども達が理解しやすいよう、自己紹介を行う。 ・演習室の施設説明を、幼稚園との空間的な関連性を持たせながら行う。 ・本時の活動内容を分かりやすく伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味関心が広がるよう、部屋の入室をゆっくり行い、活動環境や自分達の周りの状況を見渡せるようにする。【写真11】 ・捧の話を聞いた後に、子どもの意欲が広がるような言葉掛けをする。 ・靴を脱ぐ場所を指示し、捧の傍に集まるよう伝える。
10:10 (活動)	<ul style="list-style-type: none"> ・筆と紙に触れる。【写真14】 ・筆を持ち、捧のまねをして腕を動かすことを楽しむ。【写真15】 ・自分の近くにある絵の具を1つ選ぶ。【写真17】 ・捧の話を聞き、オタマジャクシになった気持ちで筆を動かす。【写真18】 	<ul style="list-style-type: none"> ・台紙の中の形が「池」であることを伝え、その中に何があるのかをイメージさせる。 ・活動で使用する道具や素材の説明を行う。 ・クラスが行った園外（宝仙寺の境内の池）での活動を思い起こす話をする。 ・保育室の水槽で飼育している生き物について子ども達に尋ねる。 ・オタマジャクシとカエルのイメージを持たせ、その成長過程と本時での絵の描き方の関連性を伝える。【写真16】 ○描き方－1：「スーイ、スイ」（オタマジャクシの泳ぎ方をイメージして）というリズムで、線を描く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話に集中していない子どもに対し、個別に声を掛け、意識を持って聞けるようにする。 ・全体の様子を把握し、個々の取り組みに合わせた援助を行う。 ・筆を動かすことや様々な絵が出来ることの楽しさに共感し、意欲を持って取り組めるようにする。

時間	幼児の活動	捧の動き、配慮	太田の動き、配慮
	<ul style="list-style-type: none"> ・描き始めた場所からはあまり動かずその場で描く。 ・絵の具を元の場所に置き、捧の話聞く。【写真19】 ・違う絵の具を選び、制作を続行する。 ・色が混ざり合うことを楽しむ。 ・汚れることを気にせず、大きな動きで描く。 ・絵の具を元の場所に置き、捧の話聞く。 ・違う絵の具を選び、制作を続行する。 ・自分で考えた描き方や楽しみ方を見つけて楽しむ。【写真21】 ・手や足に絵の具がついていることを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○描き方-2:「スーイ、ピョン」(オタマジャクシに足が生えてきたことをイメージして)というリズムで、線を描く。 ○描き方-3:「ピョン、ピョン、ピョン」(カエルが飛び跳ねるイメージで)というリズムで、ドロップピングによって線を描く。 ・自分も子ども達の作業の中に加わり、絵の具を思い切り使い描くことを、実際の制作を通じ伝えていく。【写真20】 	<ul style="list-style-type: none"> ・移動して良いことや紙の上に乗って良いことを伝え、全身を使って描けるようにする。 ・個々が行っている様子を取り上げて全体に伝え、周りの子どもの活動への取り組みが広がるようにする。 ・全身を使って絵の具に触れることの楽しさに共感する。
10:40 (まとめ)	<ul style="list-style-type: none"> ・絵の具を片付けて、出来上がった絵を見る。 ・足と手を洗い、靴を履く。 ・捧の周りに集まり、絵が飾られることを知る。 ・次の活動に期待を持ち、クラスに戻る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵の具が顔や手についた子どもに対し、集中して作業を楽しんだことを認める。 ・本時の活動の様子を伝える。 ・制作した作品【写真22】を眺めさせ、次の活動(大学校舎を使い作品を展示し、それを鑑賞する)を伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・拭いた子どもから、手と足を洗い、靴を履くよう促す。 ・自分達が描いたものができ上がった喜びに共感する。 ・子どもと共に次回への活動に興味を持てるよう、話を聞く。 ・クラスに戻るよう伝え、並んで移動する。

② 5月31日

時間	幼児の活動	捧の動き、配慮	太田の動き、配慮
(登園)	<ul style="list-style-type: none"> ・保育室のテラスに反射テープがあることに気付く。 ・前回の活動を思い出し、絵が飾られていることを期待する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・何故テープがあるのか、前回の活動を振り返りながら子ども達と考え、期待が持てるよう言葉掛けをする。
10:40 (導入)	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者の周りに集まり話を聞く。 ・反射テープを辿りながら移動をする。 		<ul style="list-style-type: none"> ・前回の活動を全員で改めて振り返り、思い出せるようにする。 ・反射テープを辿りながら移動をする。
10:45 (活動)	<ul style="list-style-type: none"> ・捧に会い、話を聞く。 ・描いた絵が飾ってあることに気付く。【写真23】 ・絵を見て、どのようなことをしたのか思い出したり、何が観えるか考えたりする。 ・次の絵の所に移動する。 ・捧の話聞き、描いた絵からイメージを膨らませる。【写真25】 ・絵でなく、建物に興味を持ち始める。 ・建物の中に入る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園から近い場所に展示された作品から、鑑賞を始める。 ・自分の描いた線や場所を発見させる。【写真24】 ・池の形が強調されるよう設えた作品のフレームについて(捧ゼミの学生が制作したこと)を伝える。 ・制作の中で感じた楽しさや、絵を描くことの楽しさを思い起こすよう、言葉掛けを行う。 ・作品が展示されたことによって生まれる非日常的な景色の面白さについて伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話を聞くよう言葉を掛けていき、全体の様子を見守る。 ・移動をする際に全員がいるか人数把握を行う。 ・子どもの発言に共感したり、問いかけたりして、絵を観ることの楽しさが感じられるようにする。 ・個々の様子に合わせた援助を行い、活動に参加できるようにする。
11:05 (まとめ)	<ul style="list-style-type: none"> ・絵の前に座り、捧の話聞く。【写真26】 ・次回の活動への期待を持ち、クラスに戻る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回のような特別なプログラムをまた行ってみよう、言葉掛けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次回の活動への期待が持てるようまとめを行い、幼稚園に戻る。



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26

・活動中の子どもの様子

今回の活動について、子ども達には事前に伝えていなかったため、登園した子ども達はテラスにあるキラキラ光る反射テープに興味を示していた。「何故、テープがあるの?」「先生が用意したんだよ」、「遠くまである?」等、子ども達なりにテープの存在について考える姿が見られた。こうした姿は、年長クラスの幼児であるからこそ、反射テープについてイメージを膨らませて考えることができたのではないかと思われた。反射テープは、活動の場所を繋ぐ目印という意味と非日常的な物語性を演出するために用意したものである。登園した子ども達の様子を振り返ると、テープの存在は非常に効果的であった。

活動のテーマにある「園足」のイメージをふまえ、幼稚園から大学までの移動は時間をかけた。普段の保育施設とは違う場所を歩くことで、どのようなことが起きるのか期待と不安が入り混じったような表情が子ども達から見られた。移動中、子どもの興味や期待が広がるよう、反射テープについての話題を続けることを心掛けた。

大学の演習室に到着し、床に敷いてある大きな紙と広い部屋の様子を見て、子ども達は少し驚いた表情を見せるが、すぐに何が起きるのか期待する様子に変化した。

今回の活動では、一人1個の絵の具を持てるよう各グループ10色の絵の具を用意した。子ども達は好きな絵の具を

選ぶことができるので、よく考えてから選ぶ姿が見られた。また紙の大きさも、一人ひとりの描くスペースが十分に確保され、腕をまっすぐ伸ばしたり、紙の上に乗って描いたりすることができ、全身を使ってのびのびと描くことができた。【写真27】子どもが全身を使って描くためには、これだけの大きさの紙が必要になるのである。

制作では、担任以外の指導者の話を良く聞いた。特に今回のプログラムでは、クラスにとって身近なカエルとクラスのマークの「池」を活動に取り込んだことで、活動に対する親しみを持つことができたと思われる。また描き方の指導方法においても、オタマジャクシの泳ぎ方、足が生えたオタマジャクシの泳ぎ方、カエルの跳び方等、クラスでオタマジャクシを飼育していることを活かし、どの描画表現も子どもがイメージをしながら筆を動かすことができた。また、全身を使って描き自分の気持ちを表現することが、子どもの表情や筆の動きに現れていた。砂場で遊んでいる時の子どもの姿もそうだが、この時期の子どもにとって、身体を動かし気持ちを解放する表現活動がとても大切であることを改めて感じた。【写真28】

二日目の活動日では、テラスに反射テープがあることに気づくと、今日も絵の活動があるのか期待する姿が見られた。作品は3か所に展示したが、低い位置に設置された作品では、子どもの目線に近いめか、自分の描いた部分を見つけ、どのようなことをしたのかを思い出し、個々が感想を言葉にする姿があった。少し高い場所に飾った作品は、こちらの思いとして池の形が雲に似て見えることを伝えたかったが、子どもは池を描いている意識が強く、違うものへのイメージの転化は難しい様子だった。こうした大人である保育者側のものの捉え方と子ども達のものの捉え方の違いもあったが、子ども達は、保育室ではない場所において絵画作品を鑑賞する楽しさや非日常的な不思議さを感じることができた様子だった。【写真29】**



27



28



29

プログラムの考察

「お絵描き〈園足〉」において設定された「活動のねらい」から、活動を事後的に振り返り、プログラムの考察を行ってみたい。「活動のねらい」は、幼児、指導者について、それぞれ三つのテーマが挙げられた。幼児は、「①共同制作による絵画制作活動を楽しむ」、「②大きなサイズの紙を使用した制作を通じ、身体的な造形表現を体験する」、「③描いた作品から壁面装飾を楽しむ」、指導者は、「①非日常的な出来事としての造形表現活動を展開する」、「②活動のプロセスの中に物語性を付加し、子どもの参加意欲を高めていく」、「③身近な環境を活用し、実験的な保育活動を行ってみる」である。

(幼児)

①共同制作による絵画制作活動を楽しむ

幼児期における絵画活動は、保育内容や子ども達に与える素材、技術に応じて、様々な活動目的が設定さ

れよう。今回の年長組でのプログラムにおいて、特に幼児のねらいの中に「共同制作による絵画制作活動を楽しむ」ことを設定した理由として、「描く行為に内在するダイナミズムを体験させる」「個々の表現や描かれた痕跡により、ひとつの共同制作作品が生まれることを体験させる」「絵の具の素材感に触れる楽しさをあらためて経験させる」の三点を挙げておきたい。

5歳児の子どもは、身体の運動機能や造形能力の発達により、ものの形を捉えることが可能になり、絵画、描画活動によって自己のイメージを図像として表現しようとする様子が見られる。こうした子どもの発達の過程は、個々の造形表現意欲が高められていく一方で、造形表現そのものがイメージの自己完結で終わってしまうことも起こりえる。そうした意味において、今回のような非日常的な活動プログラムは、子ども達自身が操作のできる造形作業の範囲（例えば、ものを描く技術や、素材の扱い方等）を乗り越えていく要素を、

意識的に制作プロセスの中に設定している。

子ども達は描くことによってその逸脱を楽しむ、あるいは別な視点から言えば、絵の具の感触を楽しみ思い切りそれを画面に定着させつつ、自己完結するイメージから解放され、それを乗り越えることを楽しむのである。プログラムは、画面上に広がっていった個々の子どもの描いた痕跡が面として繋がりをもち、結果として一つの共同制作作品という絵画の場（成果物）が見出されていく活動となった。*

②大きなサイズの紙を使用した制作を通じ、身体的な造形表現を体験する

この時期の子どもの身体能力の発達を考慮し、今回の活動の計画は進められた。こうした意図は、子ども達自身の手の届く範囲を超える作業の経験が造形活動の楽しさや精神の解放に転化されるよう、意識的にプログラムにおおられている。そしてその具体化が、今回の活動で使用する紙のサイズに反映されたのである。

5歳児の子どもの視知覚は未発達な段階にあり、自己の目で捉える視野を身体の移動によって補い広げながら、現前の空間を把握していく。こうした視知覚と身体の運動との連携によって、子どもの造形表現能力は発達するのである。今回のプログラムが、そうした身体の運動性を積極的に活動内容に取り入れ、制作の支持体となる紙の場をあえて大きく設定した理由はそこにあると言える。

また今回の活動における制作方法（描き方）や、絵の具の使用方法との関連においても、その効果が成果物に反映されるよう、十分な制作環境の設定が必要不可欠である。子ども達には、巨大な紙の上に絵の具を描き広げていきながら絵画空間を捉えさせ、非日常的な創作の体験をさせることができたのではないだろうか。*

③描いた作品から壁面装飾を楽しむ

プログラムでは、子ども達自身が自分の描いた行為や制作時に体験した思いをあらためて発見するための機会として、制作後の作品を用いた壁面装飾の場を設定することとした。作品の展示に関して太田より、「活動中の子どもの姿として、細かな部分まで観たり気づいたりする様子があり、今後も作品を観ることを通じて、想像力を膨らまし観ることの楽しさを感じるきっかけにしたい」との意見が出され、幼児にとっても活動内容を振り返る時間が大切であることを強く感じた。

今回の壁面装飾は、作品の直接的な展示を子ども達に観せるものであるが、そうした目的の一方で、子ども自身が関わった制作作品の見え方の違いの面白さを

経験させる意図も含まれていた。制作時では作品の支持体（紙）が水平に設定されるのに対し、鑑賞では垂直に作品が設置されることになる。このことは、絵を見る経験を揺さぶる大きな要因となると考えられる。制作の際は、自己の視野の中で収まっていた視覚体験が、壁面に展示されることで一気に画面全体を見渡す体験へと、シチュエーションが展開されるわけである。こうした作品を見る機会は、子ども自身が自分の表現行為を再発見し、個々の行為の集合が一枚の共同作品になったことを確認する場なのである。

また今回の活動での作品展示への展開は、幼稚園の周辺環境に対し、子どもの意識や関わりを促すこともその意図に含まれている。幼稚園教育要領における「環境」のねらい（第2章 ねらい及び内容）においても、「身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたり、それを生活に取り入れようとする」ことの意義が挙げられているが、子ども達が園内の環境に対し能動的に関わる工夫を、更に今後の保育活動の中で展開したいと考えた。*

（指導者）

①非日常的な出来事としての造形表現活動を展開する

「非日常的な出来事」というキーワードは、保育される幼児よりも、保育を行う教諭、あるいは活動のファシリテーター側が意識的に取り扱うべきテーマだと考える。今回の活動の場合、同じ学園内にある二つの教育機関間を子ども達が行き来することで、この出来事を見出す状況が生まれている。活動に期待する太田のイメージとして、「毎日子ども達と関わる中で当たり前に行っていることに小さな変化を付けることで、子どもの興味や関心が広がるのではないか」、「保育環境に変化を付けることで、活動への取り組み方がどのように変わるのか確認をしつつ、子ども達の造形表現活動に対する興味と関心を伸ばしてみたい」等が挙げられた。こうした非日常性は、プログラムのタイトルにも比喩的に暗示されているように、実は同じ学園内での移動行為（＝「園足」）そのものの内に内在するテーマでもあろう。

子ども達にとって、登園の際に見ている大学の施設に入る行為そのものが、非日常的な出来事として成立し、そこで行われる保育活動は特別な意味を帯びるのである。今回のプログラムは、子ども達の中に生まれる興味や関心をも具体的な環境設定におおしつつ、保育活動の計画を生き生きとしたものにする実験的な試みとなった。*

②活動のプロセスの中に物語性を付加し、子どもの参加意欲を高めていく

5歳児は、思考や状況の判断の発達も著しく、イメージや想像をする力が付き、保育活動の展開も楽しめるようになってくる。今回のプログラムでは、子ども達の能動的な活動への参加を促すために、幼稚園の保育室から制作活動を行う大学保育演習室までの二つの場所の間に、「お絵描きをしに出かける」という物語性を導入した。日常は足を入れることのない施設に行くことの緊張感（ドキドキする気持ち）と、「絵を描く」という期待感（ワクワクする気持ち）を繋ぎ合わせるために、活動の中に物語性をういたわけである。またこのことは、クラス担任である太田が子ども達に期待する「活動への主体的な参加意欲」を促すことに直接的に繋がっている。

こうした活動の物語性を強化するために、「活動を行う二つの空間を反射テープで繋ぐ」、「制作活動の演習室で絵を描く者（活動のファシリテーター）と出会う」、「オタマジャクシやカエルのイメージから大きな池の絵を描く」等の様々な演出がなされた。非日常的である今回の活動の物語性は、保育が進行するにつれ、劇場的なりアリティやそこに参加する楽しさを子ども達に経験させることに繋がったと思われる。*

③身近な環境を活用し、実験的な保育活動を行ってみる

今回の活動プログラムのスタート当初、太田は「日常の保育現場では、担任の教諭だけの考えに陥りやすい」という問題意識と、「保育技術をより一層高める方法として、造形表現分野の研究者からの専門的な助言や技術指導を受けるとともに、子どもの発達や成長の姿についての意見交換をしたい」という希望を持っていた。

同じ教育環境を共有する教育者間での共同研究活動は、個々の視野を拡げ、そこで行われる幼児教育活動を活性化するものである。今回の活動のケースが、そうした現場の幼稚園教諭と研究者である大学教員との意見交換の場、つまり人的交流での環境活用として機能したことは勿論のことだが、施設等の柔軟な活用を通じた物理的な空間の共有化も含め、担当者自らの身近な環境から可能な教育活動を再発見し、その実践方法を模索できたことは有意義であった。人的環境、物理的環境を含め、今回の活動プログラムは、幼児の表現活動をローカルな場所性を素材としながら柔軟に作り出す経験となった。*

活動の今後の課題

「子ども達の感性を開く表現活動について、どのようなかたちで日常の幼児教育現場の中に実践的に導入できるのだろうか」という課題からプログラムは実践された。この一文の中にある「どのようなかたちで」と「日常の幼児教育現場の中に」という二つの言葉の意味に、今回の「コラボレーション型活動プログラム」での実践の意義が込められている。「どのようなかたちで」とは、今回の活動を実施できた幼児教育の現場保育者とそれに関わる大学教員との共同研究を示し、「日常の幼児教育現場の中に」とは文字通り、前述の共同研究が日常的に実践されることを意味するのである。

子ども達は日々成長し、新たな感性で多くの出来事に触れていく。幼児教育の現場において、そうした成長という進行形にある子どもを支援し、その保育の時間をより豊かなものにしていくことが求められるのである。子どもへの保育活動への更なる取り組みは、待つことではできないと感じて止まない。今回の活動で見出すことのできた「どのようなかたちで」と「日常の幼児教育現場の中に」という二つの言葉の意義を、実践として継続させていくことが必要なのである。活動における今後の課題は、今回の具体化されたような協同作業をどのように日常的に行なっていくのか、またそうした意識を教育現場がどのように成熟させていくのかにあると言える。*

おわりに

今回のレポートにまとめたコラボレーション型活動プログラム「お絵描き〈園足〉」を振り返り、実施に際して様々なことがあったことを思い起こす。実際の活動は、平成22年5月に宝仙学園幼稚園の年長クラス「池組」を対象として行われたが、当初の計画案では、前年度に太田が担任をしていた年中クラスである「山組」の子ども達と行う企画を進めていた。インフルエンザの流行により「山組」がクラス閉鎖となり、その年度での実施を見送らなければならない結果となった。そしてプログラムは、今回の実施に至ることになる。

振り返れば、こうしたプログラムの経過は、筆者達の造形活動を通じた幼児教育の共同研究を行っていききたい意志が、より確かなものとなるための時間であったと思われる。また年長クラスで活動を実施できたことも、子ども達の造形能力や感性の発達が進んだ段階での、よりダイナミックな実践教育に繋がったのではないだろうか。実践活動を持続的に捉えていく意義について、こうした時間の経過から感じる次第である。

研究レポートには記述しきれない部分が、活動プログ

ラムには内在している。またそうした部分の中にも、今後の実践的な保育活動に繋がる可能性の糸口が潜んでいるのは確かであろう。実践結果を丁寧に整理し、つぶさに保育活動を眺めていくことの大切さを実感する。実践活動からレポート編集にまで至る一連のプログラムの経験を、今後の自身達の幼児教育活動において活かしていきたいと考えている。*

活動を行い、改めて子どもにとって造形活動の大切さを感じた。大きな紙に絵の具で絵を描く時の子ども達の表情はとても充実しており、気持ちを解放する姿があった。この活動は、引き続き幼稚園での通常の教育に繋げ、園の作品展に向けた造形活動として、大きな紙を使い「海の世界」を描く活動に展開した。そこでは活動に変化を付け、海の生き物をグループごとに描くことを行った。小さな紙に描くのではなく、大きな画面に向って描くことができ、子どもも生き生きと表現に取り組む姿が見られた。今回の活動だけで終わらせるのではなく、段階を踏み、クラスの造形活動を発展させることができた。

今回、大学教員と共に活動を行うことにより、造形表現に対する専門的な知識や柔軟な発想の大切さ等、多くのことを学ぶことができた。また逆に、現場の保育者から研究者側に子どもの姿や発達の話などを伝えていく機会になったと思う。こうした相互性ある意見交換こそ、幼稚園教諭や大学教員の質の向上へと繋がり、結果的に、子ども達の保育活動を充実させることを強く感じる。今後もこのような活動を定期的に行い、幼児教育にとって望ましい造形表現活動を考えていきたいと思う。**

なお末筆ではあるが、本プログラムの実施に際し、施設等の協力、支援を頂いたこども教育宝仙大学、ならびに宝仙学園幼稚園に対し、心から感謝を申し上げたい。また、「園足」という実験的教育活動の試みを実施させて頂ける基盤となった宝仙学園にも、この場をかりて感謝をしたいと思う。